

新刊紹介

『野宿に生きる、人と動物』

なかの まきこ著

駒草出版 四六判 255p ¥1680



「どうして、獣医なのに、ホームレスさんたちの現場に行っているのですか？」この日もよく聞かれる質問を受けた。(中略)「うーん、なんでだろうねえ。でも、きっとそういうことになっていたのかなあ」(拙書の冒頭部分より)

そういうことになっていた・・・というのが、本当に自分自身正直な答えだなあとしみじみ思う。ホームレスさん(以下野宿仲間)が保護し共に暮らす動物たちを診るようになって、6年の月日が流れた。時間の流れのなかで、彼らとおつきあいするようになり、たくさん飲み語り歩いた。それぞれが自分にしかない歴史をしっかりとよって生き抜いてきた、人生の先輩たちだ。

河原や路上に捨てられる犬や猫(ウサギも)を見捨てられずに大事に世話をしている仲間たちは、自分の食費も削ってしぶしぶの家族たちにゴハンを食べさせようとする。そのゴハン代を稼ぐのに、テントからアルミ缶を集めにいったり、時々ありつく低賃金の掃除の仕事にいったりする。その光景を、幾度となくみてきた。わたしは、どうしようもなく、そこに「打たれた」のである。

陽気で、優しくて涙もろいおっちゃんたちに、「そうなったのは、あなたのせい(自己責任)でしょう?」と言ってのける社会のほうが、明らかに病んでいると思う。そして、「ホームレスのくせに動物を飼うな」という言葉もおかしい。(じゃあ、縄文時代のヒトと犬の友情はどうなの?って思っちゃうもんね。)

野宿者支援団体の提示するところによれば、日本の野宿者人口は2万5千人を超えるそうだ。そして、国内で行政に持ち込まれて殺処分される犬猫の数、年間約30万匹。

現場に通ううちに、1人の人物と出会う。彼は、以前ナナオさんやポンさんとも交流があつてインドを3年放浪してもいた、Kさんという人物だ。Kさんは大阪の公園で、チソーラーパネルなんかも手作りしながら暮ら

す野宿仲間だが、誰かが公園で放棄した犬2匹を殺処分寸前のところで行政から奪還して保護し、さらには行き場のない仲間(ヒト)のためにテントを建てたことで逮捕され拘留される。

冗談ばかりの楽しい手紙を拘置所からよこしてくれるKさんに、多くのひとたちが励まされた。何より、わたしは確信した。「やはり“そういうことになっていた”んだなあと。」

しばらく、ヤボ用と自分のサバイバルに忙しくて、ヒッピー・マインドから離れた生活をしていた。20年以上前に、ホピの人たちや、ヒッピーの先輩たちや、自然のなかで暮らすひとたちに出会い洗礼を受け、のびのび生きてきたはずの自分が、最近はどこか根本的にダメダメだった気がする。Kさんとの必然ともいえる出会いと交流で、いろんなことを思い出し、「社会そのもの」に対するハテナマークを急速に膨らませてもいた。

野宿問題というのは、都会型社会が生み出したものかもしれない・・・(日本において野宿を強いられる仲間は圧倒的に東京・大阪はじめ都市部が多い)。また、野宿をしたいヒトに出て行けというのも、実はおかしいんじゃないいか・・・。「食べれる」「寝れる」ことって本当に基本なのではないか・・・。生き物の体温って、ほんとうに尊いなあ・・・。などなどなど。当然のことなのかもしれないけれど。

というわけで、この本は、ある意味自分の原点に近いものになっています。いびつに転がり続け、笑ったり泣いたり怒ったり、ときに頭を打ったりクダをまいたり、遠吠えしたり、銭湯の値上げを呪ったり、膝を抱える夜もあったり、決して「正しく」も「いいこちやん」でもない、わたしを含め多くのみんなへの、いのちのエールでもあります。

そして、ヒトという生き物に翻弄されている動物たちへのお詫び、またわたしたちのいのちを支えてくれている生き物たちへの心からのお礼の気持ちもいっぱい・・・というの

は言うまでもないですが。

いま、隅田川から見える、大きなタワーが建設されているけれど。このタワーが観光名所となるために、タワーの近くに暮らす野宿仲間と動物たちは「追い出し」の危機にある。同時に、このタワーを建てるために汗水を流した労働者の方々が、今後どのぐらい「切り捨て」られていくのか。このおそろしいまでの矛盾をはらんだ社会に、わたしたちはどのぐらい生きていくのだろうか。

もうひとつの世界、が今こそ求められているのだと、心から思う。合掌。

『野宿に生きる、人と動物』

なかの まきこ



動物たちを守りし田舎の路地裏の物語は、どんな風に生き残るか。
やがて、おとづれを経たる間に、身を守るために、命を守るために、彼らたちはまたたく間に動かされている。

誰かがきっとなんとかしてくれる…

その誰かとは、つまり

自分自身なのではないか、と。

—— 湯浅誠

★本の目次

プロローグ

第一章 山谷ブルース 東京に生きる野宿仲間
と動物たち

第二章 Love me tender 大阪・釜が崎の自由と不公平

第三章 Many rivers to cross 野宿仲間と
越えていく壁

第四章 People get ready 生き物みんなに
明日がくるために

エピローグ ラブレター
あとがき

★HP : <http://amanakuni.net/maki/>

←隅田川のはなちゃんとわんこ達。左が筆者。写真:坪谷秀紀(朝日新聞)